

巻 頭 言

大阪医科大学看護学部 教授 道重文子

Fumiko Michishige

本雑誌は、大阪医科大学看護学部における教員等の研究成果を広く看護界に発信し、看護学の向上と発展に寄与することを目的として、看護学部が開設された年度に創刊され、この度、第8巻が発刊されました。

平成29年3月末には、看護学研究科博士後期課程1期生の2名が修了され、研究科の修了生や在学生在が本雑誌に多数投稿されています。しかし、その論文内容をみると、第7巻では、総論1編、原著1編、研究報告4編、資料12編のうち文献検討が8編であり、文献検討が多数報告される傾向が続いています。本雑誌の果たす役割について再考すべき時が来ているのかもしれません。

平成29年度には、看護学教育のカリキュラムを編成する資料として、大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準（看護学分野）（日本学術会議：平成29年9月29日）、看護学教育モデル・コア・カリキュラム～「学士課程においてコアとなる看護実践能力」の修得を目指した学修目標～（文部科学省：看護系人材養成のあり方に関する検討会：平成29年10月31日）、看護学士課程におけるコアコンピテンシーと卒業時到達目標（案）（日本看護系大学協議会：平成29年12月パブリックコメント募集中）の3つの報告がされています。これらの報告書が作成された背景には、看護学教育の急速な大学化は十分な教員配置、教育体制を困難にすることが考えられ、教育の質を担保し、教育課程の国際的な質保証の観点からも参照基準を示すことが必要とされたからです。これらの基準の基となった調査は、平成22年度文部科学省先導的大学改革推進事業委託事業による調査研究でした。調査結果は、5群と20の看護実践能力に分類され、平成23年度の調査により看護学士課程修了時の能力として妥当と判断され、看護学教育カリキュラムの水準を示し、本学のカリキュラム構築や評価においても活用されてきました。他の分野においても水準や基準、ガイドライン等の作成や政策への進言には、その根拠となるデータが重要となります。IT化が進み、データ収集方法は拡大化し、看護学の研究においてもビッグデータの活用が論じられていますが、看護学の目指す方向を見据え、活用を考える必要があります。

看護の方向について、大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準（看護学分野）（日本学術会議：平成29年9月29日）の報告書には「必ずしも生物学的機能が良い状態を目指すものではなく、人間のwell-beingを探求することであり、むしろ『生活する身体』としての健康の状態を重視している」と示されています。保健医療を取り巻く状況の変化により看護学において「生活」という概念がますます重要視され、医療と福祉を分けず融合させる生活視点の専門的な看護が求められています。そのためには、関連諸科学との連携や当事者の体験からも学び、新たな看護実践を開発することが課題として挙げられます。

本雑誌から新たな知の発信がされることを期待しています。